

あし ば 葦 葉

同窓会だより



令和7年3月吉日
発行：滋賀県立農業大学校葦葉同窓会
滋賀県近江八幡市安土町大中503
TEL 0748-46-2551 FAX 0748-46-2552

農業大学校の 同窓会として



副会長
柏本 健一

滋賀県立農業大学校は昭和44年に高等農業学園として開校し、卒業生も1300名を超え、同窓会会員の皆様は自営就農や就職就農、農業関係団体や会社就職され、滋賀県農業の担い手として活躍いただいていること御礼申し上げます。

現在、長浜市の柏本農園株式会社で、水稲、露地野菜、施設野菜の複合経営30haを経営しています。私が卒業した平成15年当時は、農家出身の学生が多く、卒業後の進路も就農であれば親元就農だったように記憶していますが、最近では、非農家出身の学生さんも増えており、進路として農業法人等への就職就農を希望される学生さんが多いようです。

これは、農業を一つの職業として選択していただけているということで喜ばしいことだと感じています。昨今の滋賀県農業の担い手の減少は著しく、これからの滋賀県農業の担い手を十分に確保できている状況にはなく、担い

手を育成する農業大学校の使命は高まっています。

このような中、令和5年度総会において久保田会長をはじめとした新役員体制となり、同窓会として農業大学校や在校生を支援する活動を行うことができないかと話し合ってきました。具体的には、高性能機械やスマート農業機械の導入が進み、従来の「3K」といったマイナスイメージとは違う今の農業現場の状況を、農業高校をはじめとした若者に伝える事業や同窓会会報などで農業大学校の卒業生の活躍を農業高校や関係機関・団体に紹介し、職業としての農業の魅力や、農業大学校の良さを広くPRする事業を同窓会としても活動していくこととなりました。活動には経費も掛かることから、同窓会会員の皆さんには協力金も募りながら、活動費に充てていきたいと考えています。

柏本農園としましても、これから出来ること、人に必要とされることを何かを考え、時代にあった経営をしていきたいと思っています。自然相手の仕事なので、人ひとりの力は常に微力と感ずることが多々あります。数ある職業のなかから、農業を選んでくれた人、これから選んでくれる人と共に会社として、人としてみんなで大きくなっていきたいと思っています。

あしば同窓会 協力金をお願い

あしば同窓会の活動は、大学卒業時にお一人金8,000円を終身会費として徴収させていただいている会費で運営しています。

同窓会では、会員の皆さんに農業大学校や卒業生の情報をお知らせする会報の発行や卒業生の成績優秀者への副賞の授与を行ってまいりましたが、さらに在校生を応援する活動をしていきたいと考えており、同窓会会員の皆様から協力金を募ることとしました。ぜひとも、皆様の御協力をお願いいたします。

協力金は一口2,000円で、各金融機関に備え付けの振込用紙に必要事項を記入の上、左記の口座に振り込みいただきますようお願い申し上げます。

◆振込先◆

金融機関：滋賀銀行
口座名義人：あしば同窓会

会長 久保田 九
クボタ ヒサシ

店番・口座番号：

352・143205

なお、協力金の使途については、役員会で決定させていただき、この会報にて報告させていただきます。

◆学校の動き◆



校長(令和6年度)
原沢 秀幸

葦葉同窓会員の皆様におかれましては、平素より滋賀県農業を支えていただき、また本校の発展のために物心両面から温かい御支援と御協力をいただいておりますことに、厚く御礼申し上げます。

本校の今年度のトピックスですが、5月末に「東海近畿地区農業大学校スポーツ大会」を滋賀県近江八幡市で開催し、卓球団体と卓球男子個人シングルス、ダブルスともに前年に引き続き優勝するなど優秀な成績を収めることができました。卓球の優勝カップのペナントは、昭和55年から始まっていますので、会員の多くの皆様も当スポーツ大会に参加されたことでしょう。

さて、近年の卒業生の進路状況は表1のとおりですが、農業従事者(19人)の内訳としては自営就農(5人)より農業法人等への就職就農(14人)が増加しています。本校にもたくさんの方の農業法人

から求人をしていただいておりますが、特に今年度は、異業種の企業が設立した農業部門の法人に、「農業技術者」として雇用されるケースが複数ありました。新たに立ち上げた農業部門には、農業に精通した社員が少ないため、農業実践教育を受けた者が求められており、今後も増加していくと考えています。

一方、入学者は表2のとおりで、過去5年間の平均入学者数は26人(平均定員充足率86%)と、概ね確保できていましたが、令和7年度入学予定者数は17名と大幅に減少しました。これは、少子化に加え、四年制大学への進学が増加、人材不足による高卒予定者に対する求人倍率の上昇等が原因であり、一過性のものではないと考えています。

本校の外部評価委員会や農業高校の進路担当の先生と意見交換を行ったところ、「まず若者に農業を認知してもらう必要がある」「若者に訴えるには、若者が使うSNSへの発信がはじめの第一歩」との意見をいただきました。ホームページやフェイスブックでの発信はしていたのですが、農大生はそもそもフェイスブックを知りませんでした。遅まきながら、2月からインスタグラムを始めま

表1 農業大学校の進路状況(過去5年)卒業時 (人)

卒業年度	卒業者数	農業従事者	継続研修		農業団体・企業等	その他
			国 外	国 内		
R2年度	24	8	0	2	10	4
R3年度	20	12	0	0	5	3
R4年度	25	11	0	1	11	2
R5年度	22	7	0	1	6	8
R6年度	30	19	0	1	8	2

※農業従事者には自営就農のほか農業法人等への就職就農も含む

表2 【養成科】出願者数、合格者数、入学者数 (人)

入学年度	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
定 員	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30
出願者数	34	41	24	32	32	31	28	35	33	19
合格者数	30	33	22	26	25	29	26	31	29	17
入学者数	28	32	22	25	21	28	24	30	26	17
定員充足率(%)	93.3	106.7	73.3	83.3	70.0	93.3	80.0	100.0	86.7	56.7

したので、皆さまの「フォロー」をお願いします。

結びとなりますが、滋賀農大の一番の宝は、滋賀県農業界のあらゆる場面で活躍されている会員の皆様です。本校は時代の変化に対応し、今後も新たな滋賀県農業を担う農業者や指導者になり得る人材の育成に努めていきたいと思っていますので会員の皆様には、それぞれの場面で滋賀農大をPRしていただくとともに、引き続きの御指導、御支援をいただきますようよろしくお願い申し上げます。

事務局から 「学生募集のお願い」

オープンキャンパスは5月、7月、9月に実施予定です。同窓会の会員の皆様の御子弟やお住まいの地域で就農を目指しておられる方がおられましたら、農業大学校をご紹介いたしますようお願いいたします。

詳しくは、HP等でお知らせします。

Instagramを始めました
「フォロー」をお願いします



SHIGA_NOUDAI

卒業生の近況



古溝 大地さん

平成30年度卒業



近江八幡市安土町大中で自営就農しています。栽培面積7haの水稲と肉用牛の生産として交雑種と黒毛和種の肥育をしています。小さい頃から両親の働く姿を見て私もいつかこの仕事に就くのだと思う、農業高校を卒業し農大に進学を決めました。

卒業後、病気で父が亡くなり、母と二人で農業をしていくこととなりました。最初は慣れない作業が多く大変苦労しましたが、地域の農家の先輩のおかげで少しずつ出来ることが増え、続けることが

できました。

しかし、農業は気候などの影響を大きく受け、作業が変わってきます。肉用牛の肥育でも、その牛に合わせて作業が変わっていくので大変です。

最近では、自ら子牛市場に足を運び、周囲の助言も受けながらですが、見たり触ったりしながら子牛を買う目を養っています。出荷する牛も少しずつですが、品質が良くなっているという声をいただけるので嬉しく思っています。

まだまだ、勉強不足を実感することが多いですが、これからも日々の勉強の積み重ねを大事に我が家の農業、そして地域の農業を守っていききたいです。



高木 学さん

平成16年度卒業

高島市マキノ町北部の県境付近で栽培面積40haの稲・麦・大豆の土地利用型農業を家族で実践して

おり、今年度、父親から事業継承予定です。

私が幼少期に父が就農し、そこから私の農業の手伝いが始まりました。

地元の商業科高校から農大の野菜専攻で学び、卒業後は一年間実習指導員をした後、親元に就農しました。高校生の時は、農業をする意識はなく就職する予定でしたが、唯一進学を許されたのが農業大学校でした。農大での2年間の経験により実家への就農を意識するようになり、親元就農につながりました。

当初、数年間は親の水稲を手伝いながら露地野菜や育苗ハウスを利用した施設野菜に取り組み、稲作との複合経営を目指していましたが、自然環境や土質の問題、稲作との両立が難しく思うような結果が得られず離農も考えていた中、父が病気になる、そこから現在まで水稲を中心に日々栽培技術を磨いています。

私の地域は環境・立地条件がよいところであるとは言えず、苦勞することも多々ありますが様々な工夫を凝らしながら実践し、結果が得られた時に農業をできてよかったと思えるようになることが多くなってきました。

この先々、政策や農業を取り巻

く環境は不安に思うところがありますが、ピンチはチャンスと言われるように、今までの固定概念にとらわれず、新しいことにチャレンジしていく農業経営を継続していくとともに、魅力あふれる職業として選んでいただける農業経営体になれることを目標として、これから頑張っていきます。



春日かおりさん

平成23年度卒業

甲賀市水口町で就農して3年目になります。

農大を卒業後、農業に関わる仕事に就いてきましたが結婚・出産を機に農業はやめようと思いましたが。

しかし、育児をしながら次の仕事を模索しましたが農業以外の選択肢が見つけられませんでした。『ああ、やっぱり私はこの仕事が好きなんだ』そう思えました。そして家族の協力もあり、実家の農地でいちご栽培をスタートしました。

今はまだ子どもが小さいこともあり、『家事・育児と農業経営を



折り合わせる』ということを大切にしています。家庭も経営も折れてしまわないように、いけないように、時には妥協もしながら両方を大切にしていきたいと思っています。慌ただしい日々ですが毎日がとても充実しています。

いちご作りは一年に一回ですが、年々世間や環境などは変化しています。良いものを作り続けるためには基本をしっかりとし身に付けてながら、自分の技術を磨き続けること、そしていろんな変化に臨機応変に対応していく力を付けていかないといけないと感じています。

これからもお客様に喜んでもらえるようないちご作りに取り組んでいくとともに、家族の成長とともに経営も成長させ、しっかりと笑顔とお金の残る農業経営をしていこうと思っています。



中山 凌輔さん

平成27年度卒業

彦根市出身ですが、平成29年度から農業大学校の先生の紹介により甲良町の集落営農法人（農）サンファーム法養寺へ入社し、現在は同社理事として土地利用型農業に従事しています。また、令和2年に経営を学ぶ意味で同社のほ場の一部を借り受け、中山農園を設立しました。こちらでは根域制限栽培を用いてシャインマスカットを中心にブドウ生産に取り組んでいます。植栽から5年の月日が経過し、いよいよブドウ生産が本格化するので、今年の夏はワクワクしています。

今の目標として（農）サンファーム法養寺の第三者継承を達成することです。創立から20年を迎える歴史ある同社を、事業継承を終えることです。

そのために圃場をキレイに管理するなどの地道なことを徹底し、同社の組合員をはじめ、ステークホルダーの皆様に『中山へ継承してよかった』と感じていただけるよう日々の農作業に努めていきます。

トピックス

全国農業大学校等プロジェクト発表会・意見発表会に2部門で出場 ～意見発表の部で特別賞を受賞(本校初)～



令和7年2月5～7日にかけて全国農業大学校等プロジェクト発表会・意見発表会が国立オリンピック記念青少年総合センター（東京）で開催されました。

本校からは東海近畿ブロック9校の代表として研究発表の部で2年生の近藤充恵さんが「高温期に強いグロリオサ栽培試験」と題して、意見発表の部は1年生の神山佑至さんが「後世に日本人の心を伝承する農業経営を目指して」と題して発表を行いました。

審査の結果、神山さんは特別賞（日本農業新聞社賞）を受賞されました。これは農業大学校開校以来、初めての受賞となります。

東海近畿地区農業大学校 学生スポーツ大会を 滋賀県で開催



令和6年5月30日～31日にかけて東海近畿地区の農業大学校9校によるスポーツ大会を滋賀県で開催しました。近江八幡市運動公園体育館をメイン会場、サン・ビレッジ近江八幡をサブ会場として、本校学生を含めて約500名の学生が、軟式野球、バレーボール、バスケットボール、バドミントン、卓球、テニスの出場種目に分かれて汗を流しました。

大会成績では、卓球団体と卓球男子個人シングルス、ダブルスともに昨年に引き続き優勝するなど優秀な成績を収めることができました。

また、開催地である本校学生は競技出場とあわせ、各種目の競技進方や交流会開催など2日間の大会運営を行いました。この大会を通して、他府県の農大生との交流が深められたことや、学生が主体的に大会運営できたことは、滋賀県立農業大学校生としての自覚と学生の一体感につながりました。